ライフスタジオ大宮店
吉村多絵
2015年4月16日

西洋美術史　報告書

ヒーリングキャンプ２０１５

私達が美術史を学ぶ理由とは、「なぜその作品がその時代にその地域で描かれたのか？」「なぜその絵画がその時代に流行したのか」それを知ることによりその絵という視覚情報に込められたメッセージをよみとりその当時の人々を理解することができる。そしてそれは私達自身を知ることへもつながっていくのではないだろうか？

今回美術史においては「西洋美術史」を中心としてその時代に生きた人々、時代背景、時代の流行などによって変化してきた美術作品の方向性と共に、その背後にいる依頼主であるパトロンの存在と作者との関係を知りながら理解を深めていくように行っていった。そして絵を理解するためのキーワードをいくつか知ることによって色んな視点から絵を読むことをしていくきっかけとなった。

絵画は趣味として扱われ始めたのは近代になってからであり、西洋美術の歴史においては絵画は、人々に何かを伝える為の「メディア」であった。そのため沢山の画家達はバックアップにいるパトロンに気に入られる事によって美術を進める事ができたのである。また寓意画など直接的ではなく間接的に伝えようとする絵画など多くの工夫等がされてきたというこのような内容を土台として学んでいった

そして最終日には皆で美術館に足を運び「ルーブル美術館」の作品をいくつかこの目で観察する機会をいただいた。実際に絵を鑑賞する中でそれまでは「綺麗かどうか？」などで判断していた目線から、「この絵はどのようなパトロンが描かせたのだろうか？」「なぜこの絵がこの時代に描かれたのだろうか？」「この小物などが多く描かれているという事はこの時代を象徴する何かなのだろうか？」など、見る観点を変えてその絵画の背景にあるものを見つけるように鑑賞することができた。

私達は何事も「流れるままに」「鵜呑みに」していくだけではなく、自分たちで知り、その背後関係を知り、その構造を知り、その因果関係を探る中で「真実とはなにか」を追求していかなくてはならない。何故ならそれが結果的に自分自身を知る事につながるからだ。自分を知る事は人とは何か考えることであり、そうすることは自分の人生を歩む上で大きな変化のときとなるのではないだろうか

第1週 美術作品を読む

「絵画を読む」その作品に込められたメッセージを読み取り、更にその時代にその絵が流行した理由を知ることによりその時代を知ることができ、更にその時代の人々を知ることができる。
絵を読むためのいくつかのポイントを知り学ぼうということで、第1週はそれと本の内容理解をメインに進めた。視覚情報を言語情報にするディスクリプションスキル、その記号のインデックスやシンボル、多くの記号を組み合わせてできるモラル画としてのアレゴリー（寓意画）、登場する人物・主にイエスの弟子などを象徴する物を知るアトリビュート等を中心に学んでいきディスクリプションスキルの実践として絵を言語情報に変換することを実際に挑戦してみた。また、ディスクリプションスキルは実際にライフスタジオではphotogenic等の文章にも多く必要なスキルでもあるとわかった。絵を読むことは写真を分析する事へつながり、それは私達写真館において目指す写真の深みの世界へもつながる一つのツールとなるのではないだろうか？

第2週 ルネサンス期の三大巨匠とその作品

レオナルドダヴィンチ 『最後の晩餐』

イエスキリストとその１２弟子が食事をしている場面、ただイエスがこの時「この中に私を裏切る者がいる」と語り驚いた弟子達がそれぞれ話したりしているばめんである。この作品は実際教会の食堂に飾られている

⑴記号として見つけたものとその記号が示すシンボル等
魚料理＝魚（キリストの復活）、白いテーブルクロス（キリストの復活）、窓（三位一体
神）、ナイフ（受難）、パン（キリストの肉）、ぶどう（キリストの血）
⑵人物アトリビュート
バルトロマイ（書物、ナイフ）・小ヤコブ（司教：杖、冠）・アンデレ（x十字架）・ユダ（銀貨、悪魔）・ペテロ（鍵、逆さ十字架）・ヨハネ（蛇の杯、巻物）・イエスキリスト（茨の冠、十字架）・トマス（槍、三角定規）・大ヤコブ（剣、貝殻）・ピリポ（十字架）・マタイ（翼、ペン、インク）・タダイ（棍棒、槍）・シモン（ノコギリ、大工）
⑶モラル
1、弟子の罪を赦す2、これが最後の晩餐であるという心境3、イエスのリーダーシップ
②裏切る弟子を最後まで愛そうとするイエスキリストの姿（イエスは全てを知っている）→主の前に偽り、罪は隠すことができない
①晩餐とはとても貴重で尊い時間（いかに生きた主の晩餐にするか）→もしふさわしくないままで、パンを食べ主の杯を飲むなら主の体と血に対して罪を犯すことになる
この絵が飾っている場所は実際に食堂として使われていた場所だ。つまり食事をしながらまるでイエスキリスト達と同じ場で食事をしているような感じのするように作られている。そして、見たものが自分が食事をする時に主の前に嘘偽りなく立てるか？とかんがえさせられるようになっている。当時の西洋文化の中心はキリスト教であったためいかに人々の信仰を立てるかが重要であったためこのような（モラル＝教育）画が多数生まれたのだ
⑷構図
手と目線がイエスのいる真ん中に集まっている（注目されるように）、全体的に安心してみることのできる構図となっている 遠近法とシンメトリー、そして主役を目立たせるための余白である領知がある。またそれまでにはなかった一転遠近法が使われている
更に絵の手法としてまるでその場にいるような目で見たままをそのまま描いたかのような写実主義の技法で描かれているためまるでその場にいるような印象を受けることができる

ミケランジェロ 『最後の審判』

この世の終わりと神の身業の成就を意味している。聖書にも登場するが、その時が来たら全ての死者は蘇り生前の行いによって天国と地獄に振り分けられるとある そしてこの絵にはその歓喜と恐怖の姿が対象であるほど、人々が神の救いを求め生前から徳行を積もうとするためではないだろうか？死後の恐怖と絶望を呈示して現世での生の矯正を図ろうとしている。

⑴記号として見つけたものとその記号が示すシンボル等
十字架、雲、ラッパ（天使①～⑦まで）、梯子（天と地をつなげる役目）、羽、槍、鍵（天国の門を開けるもの）、車輪（世俗の不安定さ）、蛇（悪・悪魔）、柱（受難）、悪魔（厄災）、ミケランジェロ自身・人間の皮のようなもの（作品を描くにあたっての疲れ？）7という数字（全て、全体、完成数）、3という数字（三位一体）
⑵人物アトリビュート
アンデレ（X）、ペテロ（鍵）、ミノス王（地獄）、母と娘（信仰）
⑶モラル
原罪と救済、堕落したキリスト教社会への警告。2、審判＝救済
左側が地獄へ落ちていく人々で、右側が天国へ登る人々、イエスキリストは慈悲深い為地獄へ落ちる人々を心配そうに見つめている
⑷構図 一見沢山の人が描かれていたりでゴチャゴチャしているのかと思えるが実はとてもまとまっており構図の中に収められている。全体的に3Dに見えるように描かれている、キリストを中心に円を描くように注目を帯びているかたち、遠近法（人が奥にいる場合小さく描き、更に光の当たり具合を調節することにより前後差をつ

け3D感と立体感を出している。ところどころに三角構図があり、安心感をあたえている。窓の位置に丁度イエスキリストが来ているのでキリストに注目がいく。

ラファエロ サンシストの聖母

この時代聖母絵画が一番注文が多かった。キリスト教社会の大きな変革であったルターを中心とする宗教改革、そしてプロテスタントにより二分されたキリスト教はカトリックが中心となって西洋絵画を作り上げてきた。偶像崇拝を禁止していたプロテスタントは絵画もそれにあたるとしてあまり活用されなかったがカトリックは特に聖母マリアを多く描かせた。マリアには原罪が許されている存在とされておりイエスキリストよりも多く描かれている

⑴記号として見つけたものとその記号が示すシンボル等

天使（精霊・無邪気で無垢）、頭の輪（聖人・神聖・美徳）、カーテン（パトロンであるユリウス二世の墓）、壁の顔（天使たち）、帽子（冠）、老人（信仰の仕様）、ヴェール（シスター）

⑵人物アトリビュート

マリア（厳粛・受難への覚悟）、老人（司教；シクスティウス＝勇気）、婦人（バルバラ；守護聖人＝火あぶりにあったが神に守られた人物）、天使（監視）

⑶モラル

1、マリアの全人類に対する愛のまなざしではないだろうか？教皇の手が観客とマリアをつなげている

⑷構図

目線が中心のマリアへ向かっている（登場する人物の顔の傾きがマリアに向かうようにうながされている）マリア自身が後ろから歩いてきている構図になっている。

全体的に人物の配置がひし形と十字架に位置付けられている。対角線が安定している

第3週 バロック時代、ロココ時代、写実主義と印象派

フェルメール 牛乳を継ぐ人

メイドを雇っている雇い主が素晴らしいことを証しするため ①女性の美徳の称賛 それまでは男性社会にあって影で支える女性があまり表に出ることがなかったがその中で女性を讃えることをすることはとても良い印象を得ることができたため ②メイドを雇って監督しているその家の主人が素晴らしいことを強調したい
⑴記号として見つけたものとその記号が示すシンボル等
⑵階級、服装、行動
この服装は当時のメイド、お手伝いさんである立場の人が着ていた服装で彼女は固くなったパンを牛乳で柔らかくしておそらくプディングを作っているのではないかといわれている
⑶モラル
余って固くなったパンでさえも大切に食べるこのメイドを育て上げた家主をたたえるために描かれたとされている
⑷構図 全体の中心に大きなx線がある 見えない重力（牛乳の注がれる真っ直ぐなラインが見えない重力として全体のバランスを保っている） 窓から差し込む光のラインがx線のバランスをとっている。当時この青色はとても高価な絵の具だった。

フラナゴール 『ブランコ』

ロココ文化は道徳や宗教的教義から解放された性的意味を持っている（自由な恋愛）、恋愛と贅沢という資本主義の中だった

⑴記号として見つけたものとその記号が示すシンボル等

脱げやすい靴（尻軽女の象徴）、キューピッドが手を口に当てている（秘め事がある）

⑵階級、服装、行動

ロココ時代の上流階級の服装。ブランコに乗っている女性の服装のように女性中心の華やかで豪勢な服装

⑶モラル

モラルではなくパトロンであるこのスカートの中をのぞいている男性であり、この絵を依頼した主だが彼はこの絵の構成を事細かに説明し自らがこの女性のスカートをのぞいている絵を描いてほしいと説明したそうだ。この時代の宗教で決められた男女関係からは解放された少々ふしだらな時代の象徴とも言える作品である。モラルではなくこの時代の人が何を考えていたかよくわかる

⑷構図 人物が綺麗に3点を描いている、明暗の差があるため奥行きがとれている。

ラファエロの上部に余白を作って下部に3点構図を入れる形の構図となっている

ミレー　「落穂拾い」

格差社会（貧しい人々）の社会の真実を描いたとも言われるミレーの作品だ。当時、自分たちだけでは食べていく事も出来ない貧しい立場の市民たちが、無様と知りながらやむを得なく他人の畑で落ち穂を拾う住民達の様子を描いた作品である。農作業を営む日本人にはミレーの農民など一般市民を題材にした作品が人気でよく小学校などにも飾られているがこの絵の真の意味を知ると何か日本の田植えなどの風景とはほど遠い別の意味合いであるため違和感を感じざるを得ない

⑴記号として見つけたものとその記号が示すシンボル等
ミレーの絵は間接的ではなく直接的な写実主義的なのであまりシンボル等はなかった
⑵階級、服装、行動
この服装は当時の市民の中で女性が着ていたであろう服装だが、彼女達はとても低い身分の人々で貧しい市民であったとされている
⑷構図 版面率（余白の広さで絵の印象が変わる、絵の意味合いが変わる）→この余白の広さは活発ではないことを表している。目の前のメインの部分が静かに感じさせる雰囲気。溝に奥行きがある。奥の方で活発に地主が畑仕事をしている騒がしそうな背景の方でとは別で同じ畑なのにこのメインの3人の周りだけとても静かな雰囲気になっているがそれは彼女たちがこの畑の地主がではなく貧困の中やむおえず他人の畑に入る人々を表している。そしてその絵の目的に合わせてこの構図を選択し、余白の幅や背景との雰囲気の違いをバランスよく構成している

ゴーギャン 「我々はどこからきて我々は何者で我々はどこへ行くのか」

ゴーギャンの人生のすべてが盛り込まれているゴーギャン）の遺書とも言われている。タヒチで余生を過ごすため住み込んだゴーギャンがこの作品を描いた後自殺を図ったことから遺書とも言われている。ゴーギャンは人生の後半にタヒチに赴き、そこの人々とふれあいながら多くの絵を残している。

⑴記号として見つけたものとその記号が示すシンボル等

左奥にいる青い像（タヒチの神＝亡くなった娘を思って横に祈る女性を一緒に描いたとされている）、中心で赤い実を積む女性（人類始祖エバが知恵の実とされたものを積んでいる場面ではないか）、左下の白い鳥（人生は自分ではどうにもできない）、左下で頭を抱える老婆（人生の終わりを目の前にして諦めかけている様子）

⑵服装

タヒチの民族衣装で腰布の部分等そうだが昔の衣装なのでこの絵にも数人登場するがもっと肌の露出を下げた現代的な服装も当時あったのではないかとされているがあえてゴーギャンはこの絵を描いたのではないかといわれている

⑶モラル

ゴーギャン自身がこの作品の解説を残している訳ではないが、この作品を遺書のようにして残しているため彼の人生の詰まった作品と言える。この題名は新約聖書に登場するイエスキリストの言葉に似たような文面がのこされていることからそこからきた題名ではないかともいわれている

⑷構図

横に長い作品だが前後差や奥行きの色合いを出しているので更に奥行きのある絵となっている。所々に三角構図がおさめられているので見る人に安心感を与える。まんなかの果物をとる女性を中心とした三角が全体のバランスをとっており背景の青と土の色が交差しているため奥行きと構図バランスを保っている

第4週 世界大戦真っ只中の美術、シュルレアリスム

ムンク 叫び（榊原）
～恐怖と幻覚～

夕暮れ時に突然の幻覚に遭遇した人物が恐怖を感じて手を耳に当て、不安と戦っている様子「私は自然の中に大いなる叫びを感じていた」空と海が歪んでいる、その境界線も曖昧であり島のようなものも見えるがそれも定かではなく奇妙に歪んでいる。恐ろしい啓示が風景や自然を通して押し寄せてきている
実存的な叫び方で人じゃないので顔が歪んでいる、身の毛もよだつような様子。

- 夕焼け→血に見える、病気への不安
- 青→不安定な感情、赤と青野対比は不安定だから
- 赤→攻撃的な色、前に出てくる
- 画面→安定性を持たせないように歪んでいる

（構図）全体的に青と赤の色は対比の色で見る人を混乱させる色合い、構図が中心人物から逆三角になっておりわざと不安定な構図にしている。（精神の不安定さを強調するため）中心の人物の位置がこれ以上近いか遠いかで作品の見るイメージが変わってくる。（下にあるので深く下っていく印象になっている・この位置でないと悩んでるということを表せないから・世界観にぐっと入れる事の出来る位置）全体的に歪んで描かれているため作品事態のテーマにそって見るものへも不安と恐怖などを与えるような構図になっている

ピカソ 人生LAVIE（竹内）
～青の時代～

この作品はピカソの青の時代（貧困が多い時代にそのような層の人々に共感を覚えそのような絵画を描いていた）と呼ばれた時の作品で全体的に青みがかった色合いである。作品の左側には寄り添う男女がいるがこの作品ができたきっかけはピカソの親友である男性の恋愛による挫折から自殺した友へのショックから描かれた作品であり、寄り添う男女の男性は友達の彼であると言われており寄り添う女性はその元恋人ではないかと言われているそして右側には赤ちゃんを抱く女性がいる。このことからわかるのは、この作品は全体的に恋愛の性愛と母子愛の愛が向かい合っている様子が描かれておるのではないかと言われている。そして真ん中で頭を抱えて怯えている姿をしているのはピカソだと言われている。

また西洋絵画では女性が赤子を抱える姿は、聖母マリアとイエスキリストが描かれていたため、その2人を描いたのではないかとの解釈もある。また親友である彼はピカソ自身の恋人でもあったそうだ

- 青→悲しみ
- カサフェマス→ピカソの友人
- エルグレコー→垂直の画面
- 孤独や苦労、不安→後ろの二人（ピカソ）

ゲルニカ（高津）
～スペイン内戦（フランコ将軍とナチス）～

初めて一般市民に戦争の矢が向けられた地上戦の空爆（無差別空爆）その舞台になったのがゲルニカであった。１６００人の市民を犠牲にしたこの空爆への苦しみと恐れが現れている絵画である。ピカソ自身は社会主義派で共産党だったそうで、フランコ将軍が嫌いだった。★この頃ピカソの絵には政治的意味合いが多い★

この様子をピカソは描いたのだがこの絵の意味合いについて彼自身が何か解説を残したわけではない。多くの人々の憶測になってしまうのだがそれだけ人々に訴えかける作品であった。右側の逃げ惑う2名の女性たちは実際にこの絵をピカソが描いている後ろで喧嘩をしているピカソの恋人たちがモデルだったのではないかといわれている。

- 目→爆弾かまたは空爆を見つめる神の目
- 死んだ子を抱える女性→ピエタの銅像がモチーフではないか？と言われている
- 牛→スペインを象徴（黒色なのでスペインの日常が破壊されている）
- 馬→フランコ将軍
- 鳩→平和の象徴の鳩が黒く塗られているので平和が脅かされている
- 倒れた兵士→スペインの敗北
- 花→小さな希望
- ランプを持った女性→ランプは真理（社会主義の象徴）
- 建物から落ちている人→ピカソ自身
- 明るい色合い→まだ生きている、黒い色合い→死んでいる
- モノクロ→新聞やラジオで情報を得ていた（くみとって）

（構図）全体を中心に大きなX字構図が出来ており、中心のろうそくから三角の構図が描かれているため、ごちゃごちゃしているように見えるがバランスをとっている。横に長い構図で安定。色が無い（内戦）X構図→戦争反対

マグリット　人の子（北岑）
～知恵と個性を極めた人の美しい形～

リンゴは聖書の失楽園物語に登場するアダムとエバが食べた知恵の実として描かれることからこのリンゴは知恵を表しておりそのリンゴが人の顔の前にとびだしているということは、この人物は知恵がないことを意味している。さらに個人の個性の象徴でもある顔を隠されたこの男は、個性を剥ぎ取られていることを意味していそしているのだ。更に背景に描かれている海（川）は日本でも三途の川というように死後の世界へ行くということだ、「水を渡ること」は死ぬことを意味する。したがってこの作品が名作である理由は、知恵・個性・生という、人間を構成する基本要素をすっぽり失った人間のあり方を、極めて美しい形で表現した点にあるということだ。限界状況におかれた人間のニヒリズムを表現した点にこそ、この絵画の真骨頂があるといえる。
この絵画は、ニヒルさを表現するというよりも、ニヒルさを「届けよう」としているもう一つのPointがある。それは、この絵画における登場人物は実は二人だということ。もちろん、絵画に描かれているのは男一人だがこの絵画を見ている「観覧者」が、二人目の登場人物として描かれている、この絵を閲覧しながら「わたしは今、わたしが持つすべてを失った自分と向き合っている」というようにこの絵を観察することができるのだ。
誰の顔にもなり得るし誰でもない様子なので、全てを失った自分とむきあっているような印象を受ける絵になっている

- リンゴ→知恵の実
- スーツと帽子→一般的な姿（当時）
- 海→死の象徴
- 石垣→死の境界線
- 顔→個性の象徴

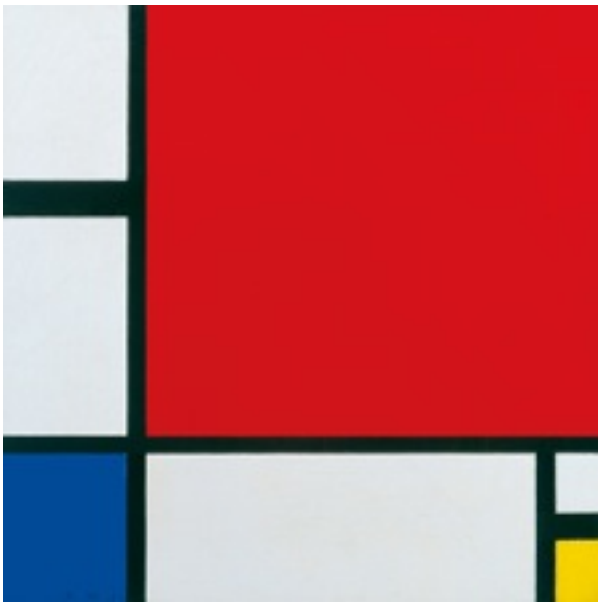
人間の条件（金リーダー）
～現実と非現実～

室内から見た外部の風景。室内と外部の間にはあたかも風景を切り取るように窓が穿たれている。この窓枠に合わせるようにして、キャンバスが象られ、そこに、外部の風景が詳細に模写される。キャンパス上に描かれた風景はあくまでも2次元上に配置された形態や色彩だが、窓の外に広がる風景は三次元的奥行きを持つ延長としての世界である。

人間はあたかも内部と外部のように感じるなにがしかの空間感覚を持っている。外部は客観世界と呼ばれ、内部は主観世界と呼ばれる。それらはそれぞれこの作品では室外と室内として描かれている空間のことであり、その境界に設けられた窓は目の役割に等しい。画家は視野そのものをタブローとして、この室内と室外の境界面に起きる出来事を作品にするが、それは、ときに感情、ときに思考という反応を通じて、一つの経験の風景としてモチーフ化されていくわけである。

まぶたを通してみるのがキャンパスであり、その先の窓は境界線だがその認識は正しいのだろうか考えさせられる絵画である

- 主観と客観はとても曖昧である
- キャンパスの上は二次元だけど後ろは三次元
- 現実にも自分の観念にも木は存在している
- 皆外の存在として認識している
- 感情や思考は意識の動き→絵そのもの
- 主観客観はくっついていて私達は見たいものだけみているため、誤解してみているのかもしれない、奥にある三次元は奥にある本質なのではないか？



モンドリアン 赤青黄のコンポジション（金子）
～絵画からデザインの世界へ～

目的は「純粋なリアリズムの表現」
第二次世界大戦後世界は急速に高度成長期を迎え、そんななか構図やデザインなどに着目した芸術が生まれ始めた。モンドリアンのコンポジションはその土台ともいえるバランスを持ったものである
きりつめて支配する世界。これ以上にない組み合わせとなっている。太い黒の部分は赤への対象となっている
ネオプラスチック絵画、物事の本質を明らかにしようとした

- 新しい象形のモデルとなった
- 新象形主義（ネオプラスティシズム）
- 三元色と無彩色
- 骨というものを中心としている

～討論～

Qどちらの画家に描いてほしい？
・自分に自身があるからありのままでいい
・その人にしかかけない自分を描いてほしい（それが美しいかどうかは関係ない）
・自分が見ていたい絵が欲しいから美しく描いてほしい

・変化が欲しい
Q美術とは自分にとってどんな存在か
・自分が豊かになっていく喜びだ
・部屋に飾りたくなる絵画が現れたらいい
・絵画＝家訓。感覚を取り戻してくれる存在、変わらずに同じ意味合いを与える
・人って意味付けするものを持ちたがる（鞄、時計、指輪）
・常に自分を原点に戻してくれるもの（シンボル）
・ヨーロッパでは絵の売買がとてもさかん（ステータス）
・絵画とは自分の癒しだ（見ていて落ち着くものを飾りたい）
・絵画とは余裕の象徴なのではないか（自分は余裕が無いと飾らないから）
★絵画の癒しによく登場するもの（美の象徴である花や女性のヌード）

Qこれからの未来に何を残していきたいか、伝えていきたいか
・可能性がある、希望がある歴史
・人間の美しさを取り出すもの　人間を知る
・客観的な自分を求めるものを選びたい
・家族愛、協調性が感じられるものを残したい
・いろんな表現の仕方があることを絵画を通して伝えたい
・視野を広くみせたい
・過去を受け継いで未来につなげていきたい